

津島高校 “国際 week”

6月11日(火)～6月20日(木)は、津島高校の“国際”的な催し物がめじろ押しでした。

6月11日(火) タイ・バンコク都教育関係者視察団訪問

6月12日(水) 津島市立南小学校 英語出前授業、オーストラリア研修説明会

6月13日(木) 第1学年 国際理解講演会

6月14日(金) 第2・3学年国際理解コース 愛・知・みらいフォーラム出前授業

6月20日(木) 第1学年 国際理解コース 大学による模擬授業

その中の一部をご紹介します。

6月11日(火)

タイ・バンコク都庁教育委員会と校長先生方42名が、津島高校に視察へ訪れました。本校の姉妹校であるウィチュティット校のタナラ校長先生もいらっしゃいました。9日(日)に成田に到着し、約1週間、日本の教育施設を訪れる視察旅行です。

本校に午後1時半に到着し、国際理解コース2年生がタイ語で「ようこそ」と書かれた横断幕を持ってお出迎えしました。興学館でレセプションを行い、緑茶と地元の和菓子屋「らく楽菓子舗」さんのバラをかたどった練り切りでおもてなしをしました。PTAの保護者お二方には、羽織袴とお着物でご参加いただき、タイにはPTAがないようで、タイの先生方は興味深そうでした。その後、2つのグループに分かれ、国際理解コースの生徒たちと授業見学ツアーを行いました。1年生の書道や音楽の授業に大変興味を持たれた様子で、座学の授業の様子はタイとほぼ似ているようです。



興学館に戻ってから、国際理解コース2年生が浴衣を着て「盆踊り」を披露し、タイの校長先生方にも参加していただき、大変盛り上がりました。次に、2年生が学校紹介プレゼンテーションを行い、最後に3年生が昨年から取り組んでいる「つしま・サステナブル・もったいない・プロジェクト」について英語で披露しました。尾州毛織物使用の津島高校新制服作成時の端切れを捨てずに再利用し、制作には障がい者の方たちの雇用を促進する団体様のご協力をいただき、尾州毛織物の認知度を高めるという3本立てのプロジェクトの第1弾「(制服端切れ) ペンケース」について説明しました。また、このプロジェクトでお世話になっている津島毛織物工業組合からお土産として、このプロジェクトの元となったペンケースをご提供いただきました。その他、津島市役所や観光協会から様々なお土産をご提供いただき、津島の文化に少し触れることが出来ました。

生徒の発表後は、タイの先生方と津島高生の意見交換会をしました。ニュージェネレーションである日本の高校生が、どのような生活をし、どのような将来を思い描き、何を今望んでいるかなど、熱心に聞いていました。最後に、タイの先生方が歌を歌いながらタイの踊りを披露してくださり、生徒も交ざって楽しみました。弓道部や剣道部の活動を見学しながら見送り、あっという間の2時間でしたが、参加した生徒たちは、「タイの校長先生と沢山話せた!」「タイに行ってみたくなった!」「タイは女性の校長先生がほとんどで驚いた。」と興奮した様子でした。コロナ禍を経て、対面で文化交流をする楽しさと大切さを味わったひと時でした。



6月13日(木)

7限に、第1学年全体に向けての国際理解講演会を行いました。JICA 国際協力出前講座の一環で、今年度は、平成18年度にアフリカのガーナへ村落開発普及員として派遣された、石田 純哉 様にお越しいただきました。石田様は、ガーナだけでなく、ブルキナファソやベナン共和国でも、学校や地域の井戸、トイレの設置に携わり、水に係る疾病予防対策や保健衛生週間の定着などの活動を行い、現在も西アフリカのフランス語諸国の学びの場の環境改善について活動をされています。

1年生の英語コミュニケーションIの授業では、ちょうどアフリカのザンビア共和国の気候変動問題について学んでいるところで、今回の講演会で実際の体験談を聞き、普段あまり耳にしていないアフリカについて身近に感じ、思いをはせることが出来ました。また、国際協力とは何かを真剣に考える機会ともなりました。



以下は生徒の振り返りの一部です。

「今までは、国際協力と聞くと、個人ではなく国や大きな団体が行うものというイメージがあり、自分には関係ない話だと思っていた。しかし、今回の話を聴いて、直接支援するということはなくても、国際協力とは何か、その意義を考えることがまず大事だと思ったし、身近に感じる事が出来た。」

「他言語を学ぶと、得られる情報が変わり、種類や幅も広がるとおっしゃっていた。自分も学生のうちに少しずつでも習得したいと思った。」

「国際協力は難しい挑戦なのに、やりがいがあるからやると思えるのが、石田さんは前向きでよいと思った。自分も、難しい挑戦から逃げるのではなく、様々なことを体験して、やりがいを感じられるようになりたい。また、周りで困っている人を見かけたら、迷わず声をかけて、助け合っていきたいと思った。」

「(石田さんのおっしゃられたように) 体験するのも学びなので、やらない理由を探すのではなく、やりたい理由を探していき、目標を見つけて今の自分をレベルアップしていきたいと思った。」

生徒たちは、若い感性を刺激され、それぞれの生き方に一石を投じたようです。

6月14日(金)

国際理解コース、戦争と平和について考える

第5・6時限、国際理解コース2年生全員22名と私大コース3年生5名を対象に、NPO「愛・知・未来フォーラム」が主催する出前授業で、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授西川由紀子様に講演をしていただきました。

戦争は悪いことで、戦争以外の方法で問題を解決すべきだと誰もが分かっているのに、なぜ戦争が起きるのでしょうか。そして、一度始めてしまったら、途中で戦争をやめることはなぜできないのでしょうか。その2つの問いの答えを、ゲームをとおして国際理解コースの生徒は知ることができました。

2つのグループに分かれ、それぞれ「平和」・「戦争」・「核兵器」という3枚のカードを使います。どちらのグループも平和を出せば、両方のグループに3点が入り、どちらも戦争を出せば、1点ずつ。自分のグループが戦争、相手が平和なら自分に5点、相手は0点。核兵器を出せば、相手はそれまで獲得した得点が0点になり、自分もその回のみ0点になります。6回カードを出し、6回目が終わったところで10点とったら勝ちというゲームです。3回目が終わったところで、各グループから一人代表者が出て交渉し、4回目に入ります。

このゲームを2セット行いました。さて、津島高校国際理解コースの成績は、と言いますと、2回戦ともどちらのグループも負けでした。「勝ち」を意識し相手を負かそうとしたことが敗因だそうです。両グループが「協力」し、平和を3回出しさえすれば、どちらのグループも勝てたのです。また、交渉が守られないと、相手を信じられなくなり、最終回にはどうせ負けるのなら、核兵器を出し、自分も相手も0点にしようと考えてしまうのです。戦争をやめない国を批判しておきながら、ゲームでは平気で戦争や核兵器のカードを勝ちたい一心で出すのです。人間の深層心理って恐ろしいなと誰もが思い知らされました。「人

間が複数集まれば、争いは起こる。それを武力ではなく違う形にもっていくことが、これからの世界を生きていく津島高校の生徒には必要だ」という、西川先生の熱いお言葉が、全員の胸に刺さりました。



6月20日(木)

6・7限に第1学年国際理解コース対象の南山大学模擬授業を行いました。本年度も、南山大学総合政策学部教授の山田 哲也先生にお越しいただき、「国際理解とは何を学ぶことか」という題で授業をしていただきました。国際理解コースを選んだ理由の問いかけの後、英語を「正確に読む・書く」ことや母語である日本語力の大切さをまず学び、学んだ英語をどう生かすかを考えました。また、国際理解とは、自分たちが「当たり前」ではないことに気づき、よその国をとおして自分のことを見つめなおすことであり、自分の幅を広げることであると気づかされました。今日の模擬授業で学んだことを生かし、これからの高校生活3年間を、「大きなスケール」で物事を考え、失敗を恐れず伸び伸びといろいろなことを吸収して過ごして行ってほしいと思いました。

